

大陸（中支）

中支戦線での司令部勤務

岡山県 大森 学

召集令状が来た

昭和十四（一九三九）年四月、補充兵の私にもお召しがかかった。「臨時召集令状」いわゆる赤紙である。ちようど支那事変が始まって一年半、村の若い衆は次から次へと出征し、新聞やラジオは毎日毎日、戦勝の記事とともに名譽の戦死、戦傷者が報ぜられ、兵隊に行かない者は恥じらうようなご時世であった。

尽忠報國、天皇陛下の御為、私にはそのような大それたものはなかったが、これで世間並という安堵感

と、一方軍隊生活の不安、早く亡くなった親父、代わって我が家を支え育ててくれた母を一人残して行く、一抹の寂しさはあった。

ところが、私の心配とは裏腹に、母は息子をお国に捧げることができたという安心感か、とても明るく振るまってくれていてほっとした。さすが軍国の母だなあと思つて嬉しかった。

入隊まで一週間の余裕があった。私の勤めていた会社は世界一の「硫化鉄鉱」を産出している岡山県の柵原鉱山だった。後始末を済ませ、町役場の手続きも完了し、町主催の武運長久祈願祭にも参列、千人針も頂いた。会社の同僚からは、記念の寄せ書きも頂いた。会社、町役場、親戚、そして村全戸の挨拶まわりも済ませた。遺髪、遺爪も残した。ひょっとしたら二度と

帰れないかもしれない。だからこそ後顧の憂いのないように準備万端済ませ、すがすがしい気持ちで入隊の時を待つこととなった。

入隊の日

私の召集令状は「昭和十四年四月二十七日午前十時マデニ姫路歩兵三十九連隊ニ入隊スベシ」であった。私の家にも万国旗が掲げられていた。村の団体の代表の方々や、村のほとんどの人が見送りに来てくださった。これが土地の習慣であった。この日は伊部町（現在の備前市）から、私を含め四人の出征兵士がいた。例によって幡上助役さんのお祝いと激励の挨拶があり、一緒に行く仲間の中に既教育の軍人がいて、代表して答礼の挨拶をした。

今までこの駅へ何人の兵士を見送りに来たのだろうか。とうとう自分が送ってもらう順番になったのである。片上駅頭での出征風景はいつも同じ、『出征兵士を送る歌』の合唱である。

わが大君に召されたる 生命はえある朝ぼらけ

たたえて送る一億の 歓呼は高く天を衝く

いざ行けつわもの 日本男児……

「万歳！ 万歳！」汽車が動きだしてからちょっと感傷的になったような気がする。

間もなく姫路駅に着いた。第十師団司令部の所在地である。街は兵隊ばかり、城東練兵場を通り抜けたすぐ横の歩兵第三十九連隊の営門をくぐる。

元気のいい下士官が来て点呼を行った。そして身体検査があった。即日帰郷だけにはなるまい。後から分かったのであるが、我々は三十九の要員ではなく、新設の独立混成旅団通信隊要員であったので白鷺城のすぐ近く、二階建ての兵舎に移動した。内務班割りが行われ、私は第三内務班に配属された。部屋の長机には被服が山と積まれている。軍衣袴・襦袢・袴下・軍帽・略帽・編上靴・上靴・営内靴・巻脚絆・靴下・襟布等々である。

「聞いとれい！」と班長が言う。「私物の衣類を持って帰るために、家族が面会所で待っておられる。直ちに風呂敷包みにして名札を付けて差し出せい。な

お、郵送するものは今夜荷作りするから、それまでに整理しておけ」と。今日だけは二年兵が炊事から飯上げをしてきて配食してくれた。おまけに赤飯だった。今日から私の住所は、次のように書いた。

「姫路市天羽部隊 永島隊 第三班 大森 学」

隊長永島大尉の軍人勅諭の奉詔と訓辞。小林准尉の個人面接。ウロウロ、キョロキョロしているうちに日は暮れる。班内の裸電球がポカリと灯る。やがて点呼掃除、それから日夕点呼、間もなく消灯ラッパ、生まれて初めてわら布団の毛布の中にもぐり込む。今日だけは、体よりは神経の方がクタクタに疲れているのになかなか眠れない。

厳しい内務班

永島隊第三班の班長は角伍長（松江第六十三連隊）、班付が前田伍長（岡山十連隊）と永田伍長（鳥取の四十連隊）であった。私の班長は三人とも人格者で、よく聞く鬼軍曹ではなかった。だが、三班の古兵には手をやかす連中が二、三いた。

兵営の目的は「起居の間、軍人精神をかん養し、軍規に慣熟せしめ、強固なる団結を完成するにあり」となっている。

「お客三日に 居候四日 七日過ぎたら タコを釣れ」こんなことを聞いたことがある。初年兵の処遇に関する標語である。軍隊生活の体験者はいろいろであるが、特に戦時中に引つ張られた連中ともなると、軍隊というところは、ただもう訳も分からずいじめられるところだ、と決めつけ、私的制裁を強調して、軍隊の不条理を憎むことはなほだしい。無理もないが、しかし、元来軍隊たるところは、会社や学校の合宿所でもなく、一朝事あるときは、国家の防人を養成する場所であってみれば、それ相当に厳しくあるのは致し方ないといえる。

戦時の場合は二年兵、三年兵、ときには四年兵、五年兵さんのいるのが普通である。ところが、我が永島部隊は、将校、下士官を除き、兵隊は全員十三年兵（昭和十三年に徴兵検査）という珍しい部隊なのだ。一月に入隊した現役兵が古兵、四月に入隊した補充兵

が初年兵であった。全員同じ歳の二十一歳であったが、わずか三カ月早く麦飯を食っただけで、たしかに兄貴に見えたから不思議な社会である。一年も過ぎ、その差は消えたが、現役の中がいつまでも補充兵よばわりをするのがしゃくでならなかった。体形的にズングリ形が現役で、スマート形が補充兵であったようだ。

古兵と新兵は寝台が交互になっており、どちらかの隣の古兵が新兵の戦友といって、何かと面倒を見てくれるのである。優秀で親切な戦友を持った新兵はどれほど得をすることか、私の戦友は幸いにも、第六十三連隊（松江）出身の千原さんであった。出雲弁で少々分かりにくい時もあったが、人柄のとてもいい方で、何回か私の毛布の中にソツと納豆を差し入れてくれたことが、いまでも忘れられない。

初年兵教育の始まり

初年兵担当の教官は、松江第六十三連隊出身の野坂見習士官であった。精かんではりきり屋、初年兵に

とっては大変怖い存在であった。教官の下に助教と助手がいる。助教は下士官で、助手は上等兵か古参の一等兵である。このころ兵長という階級はなかった。

陸軍でも海軍でも衛生兵でも主計兵でも、兵隊と名のつくものは、すべて基本教育だけは受けなければならぬ。必須科目である。「気を付け！」「休め！」「敬礼！」から「整列！」「行進！」など三日間ほどはそればかり、反復して訓練が実施された。その後、歩兵本科の任務である。射撃、銃剣術、ほふく前進などの戦闘訓練も一応習熟したが、一般訓練の中で何としても忘れられない記憶がある。野坂教官はいつも長靴を履いていたが、時々巻脚絆で現われる。その時はもう覚悟しなければならぬ。駆け足が待っているのである。雑のう・水筒をかけ、騎兵銃を持って、おまけに巻脚絆にドタ靴での駆け足の苦痛は経験したものでないと分らない。

クタクタになって兵舎へ、すると次は永島部隊長の「精神訓話」が待っている。全然ユーモアのないのがこの精神訓話である。「オソレオオクモ」という言葉

が出た瞬間、両足かかとがカチッと合わされる。椅子に座っているときは上半身を正す。これは天皇に対する儀礼であった。これも今の人には理解できないことの一つであろう。当時あれほど怖かった野坂見習士官、戦後間もなく、郷里鳥取県大山の麓、溝口で他界された。本当は心の優しい典型的な武人であった。

モールスの特訓

我々の通信隊は、いわゆる特科部隊である。最低四カ月はかかる。平時であれば二年かけてじっくり教育すればよいのであろうが、戦時中はそうはいかない。その年初め中支に新規に編成された独立混成第十四旅団の通信隊として現地到着を待っているのだ。

歩兵の基本訓練はそこそこに、通信兵の基本ともいえるモールスの特訓が開始された。その頃、白鷺城下、姫山公園の桜は散り、葉桜が満開であった。その若葉に手のとどくような所に通信講堂があった。

先生は通信学校出の色白の下士官であった。この訓練は体が楽なだけに、眠くてどうにもならない。コク

リとやると、すぐ剣道の竹刀が飛んでくる。隣の仲間がカチンとやられても、一分もたないうちに今度は自分がコクリとくる。

モールス信号とは、短音（トン）と長音（ツー）の組み合わせである。ツーはトンの三倍の長さにキーを叩くのである。それを文字に書き換えるのである。半世紀以上たった今、思い出して実に懐かしい。モールス信号は無線通信のみならず、軍隊では手旗信号にも回光機信号にも応用する。モールスの習得は通信手たる者の基本であった。その特訓も一カ月がたった。テストも度々行われた。そして有線と無線に区別された。その後はそれぞれの部署での訓練に入ったのであった。

水田軍曹の存在

入隊して間もない、ある夕食後のことである。三班の水田班長（当時伍長）が見え、「初年兵集合！」がかかった。

水田班長は、「ただ今から銃の名称について説明す

る。よく覚えておけ。これは三八式騎兵銃という……」。銃身・銃口・銃把・床尾板・床門・照星・こ
うかん・撃莖発条・遊底覆などかんで含めるような懇
切丁寧な要領を得た説明であった。

兵隊方というところは、上の者が大声で偉そうなこ
とばかり言うところ、とばかり思いこんでいた私に、
地獄で仏にでもあったような感覚を与えた。ああこん
な人もいるのかなあと、その時から私は水田さんの虜
になってしまった。持って生まれた温厚な風貌と、そ
して偉ぶらない人柄は、三班全員の尊敬の的であっ
た。

戦地へ行っても水田さんに付いて行こう。そう思っ
たのは私だけではなかったと思う。水田班長は兵庫県
の出身で、鳥取第四十連隊の機関銃中隊の出で、鳥取
砂丘で鍛えられた強者なのである。戦地に着いて最初
の任務で廬山に駐屯の佐沢部隊に配属になったとき
も、私は幸運にも水田軍曹と一緒に、苦しい勤務の中
にもいつも何か潤いがあった。年一度の戦友会での再
会が何よりの楽しみである。

通信教育の始まり

有線と無線に分かれて、いよいよ本職の通信手とし
ての教育がはじまった。我々有線の教官は橋少尉と野
坂見習士官であった。二人とも通信のことについては
素人のようであった。教官はなにも知らなくてもよ
い。助教の下士官連中には専門家が大量いた。中には
神様といわれるような藤田伍長もおられた。「テンパ
重し」「電撃ヨーシ」「電鍵ヨーシ」「地棒ヨーシ」こ
れは九二式電話器の点検である。「電撃ヨーシ」のと
きは、電流がピリッと伝わるので嫌だった。電線は黄
色い九二式被覆線といって、一巻の長さは忘れたが重
さは七・五キロぐらいあったのではないか。受話器に
は取っ手が付いていて、カチカチと握ったときだけ送
信回路が働くような仕掛けであった。

さあ、一応電話器の操作、操着、携行の訓練も終
わった。いよいよ延線・架設・補修・撤収、そして最
後に敵前下の延線・架設となるのである。橋小隊長か
ら「第二分隊へ現在ノ旅団本部ヲ起点トシ、〇〇ニア
ル〇〇大隊本部トノ有線連絡ニ任ズベシ」いつもこの

ような命令が下達された。

作業のなかで延線はまず楽な方で、七・五キロもある被覆線を三巻も肩にかけて走るのは厳しかった。一番苦しかったのは、撤収のときの回転機を胸に装着して、右手でテンバを回す作業であった。今思い出してもぞっとする。姫路の白鷺城を中心として、市川、夢前川、揖保川など永島部隊の演習した地名が今は懐かしい。

補修訓練中の失敗

七月の初め頃だった。訓練も終盤を迎え、一期の検閲も目前に迫っていた。姫路の市街地から西北方郊外での有線架設演習中での出来事である。私は分隊長の命令で、分隊から離れて単身線路の補修に出っていた。

架線棒（正式の名前を忘れた）を掲げて、汗びっしょりで道路を走っていた私に、道路側で用便をしていた中年の男から「兵隊さんご苦労さんですなあ。初年兵さんは腹が減るでしょう」と言って、止めていた自転車の荷台から、何かつかんでくれた。私は即座に

「結構です。演習中ですから」と言った。その男の人は「軍隊は要領なんだ、俺も満州事変下番で何もかも知っている。心配せんでいい」と言って親切に勧めめる。実のところ腹はベコベコ、つい手を出してしまいい口に入れた。ゴボウのてんぶらだった。

これからが問題だった。山の彼方から橋少尉の乗った馬が現われた。私のホッペは大きく膨らんでいる。橋教官は何も言わずに通り過ぎて行った（演習中は上官に出会っても敬礼はしなくてよい）。しかし、夕食後当番兵が「大森二等兵、野坂見習士官が呼びだ、すぐ行け」と。ばれたか、あの時私の動いている口元を橋少尉は目撃していたのだ。

覚悟はしていたものの、もうどうにでもなれと将校室のドアをノック、「大森二等兵まいりました」「入れ」部屋には野坂見習士官一人であった。

野坂見習士官は、いつもの演習中の厳しい態度とは全然違い、柔和な口調で「お前、今日演習中に何をしていた」「はい、てんぶらをもらって食いました」「どうだ、うまかったか」「はい、うまありませんでし

た」。野坂見習士官は笑みをうかべながら、「正直でよろしい。演習中に地方人から物をもらって食う行為は『営倉（地方でいう牢屋）』ものだ。しかし、お前はまだ一期の検閲も終えていない。まだ兵隊の卵だから今回は許す。今後このようなことは絶対するな。帰れ。そして頑張れよ」と笑ってくれた。この時から、私の野坂さんに対する尊敬の念は増すばかりであった。

初年兵の日常

初年兵は起床ラッパの鳴る前に目を覚まし、こっそり軍衣袴を着け、便所に駆けこんで出すものを出し班内に戻り、二年兵に気づかれぬように、毛布をそっとたたんでラッパの鳴るのをじっと待つのである。ラッパが鳴るとすぐ営庭に整列できるからだ。

「飯上げ！」と週番上等兵の声がかかる。二百人近い兵隊の食事を炊事に行つて、十人くらいの兵で隊の方へ運ぶのである。持ち帰って飯缶と汁缶を、各班の人数に合わせて分配する。週番上等兵の任務も大変だが各班へ持ち帰った飯と汁を盛り付ける初年兵も大変

である。隣の班から「いただきまーす」の声がかかる。我が班はまだ盛り付け中である。そのとき古兵から「トロトロするな！」のおしかりの声がかかる。均等に盛るのはなかなか熟練がいるのである。

やっと食べだしても、早いことかき込まないと、战友の食器洗いが遅れる。するとまた週番上等兵の「食缶返納！」の声がかかる。息つく間もなく、今度は「初年兵演習に整列！」となる。演習から帰ると、すぐまた昼食の「飯上げ」「食缶返納」だ。そしてまた「演習に整列」だ、帰ってくるとまた……きりが無い。モタモタしているうちに電灯がともる。その下で、銃と剣の手入れ。ついでに編上靴の手入れ。そうしているとも早くも「点呼整列」となる。ともかく、めまぐるしく忙しいから、洗濯は日夕点呼後か、まごまごすると消灯後になる。いうまでもなく战友の分もしなければならぬ。洗濯場でこっそりやっている時、週番や巡察に見付けられることがある。「洗濯は夜することになっていない」と、しかりつけられる。「ああ！早く二年兵（モサ）になりたいなあ！」初

年兵の皆がいく切実な悲願だが、軍隊には落第もな
いかわり、どんなに優秀でもモサが除隊しないかぎ
り、絶対にモサにはなれない。初年兵と二年兵の違い
は「天国と地獄」と言えるのである。

軍歌演習

「初年兵！ 軍歌演習に整列！」夏の夕方、班内で
まごまご片付けをしていると、原田古兵の声がかか
る。待っていましたとばかり、初年兵は営内靴をつっ
かけて舎前横の公園に集合する。原田古兵の号令で輪
をつくり行進がはじまる。体は大きくないが、声の
でっかい原田古兵殿、輪の真ん中で、「最初は『戦友』
だ！」と言う。「ここはお国を何百里……」と、いい
声で歌う。皆も続けて「ここはお国を何百里……」と
繰り返して歌う。私の好きな軍歌は、「愛国の花」「愛
馬行」「愛馬行進曲」「海軍小唄」「討匪行」「馬賊の
歌」「日本陸軍」「歩兵の歌」いろいろあるが、とくに
好きだったのが「ポーランド懐古」だった。

一 一日二日は晴れたけれど

三日四日五日は雨に風

路の悪しきに乗る駒も

踏みわずらいぬ野路山路

二 ドイツの国もゆきすぎて

ロシアの境に入りにしが

寒さいよいよまさり来て

降らぬ日もなし雪あられ

三 さびしき里にいでたれば

ここしいずことたずねしに

聞くね哀れやそのむかし

滅ぼされたるポーランド

兵隊は皆、勇ましい軍歌よりも、どこか哀調をおび
た軍歌の方が好きなようで、それはまた我々初年兵の
心理状況にぴったりするのであった。私は二回目、三
回目と再召集になり、いろいろな部隊を経験し軍歌演
習もやったが、初年兵当時（姫路）の原田さんを忘れ
ることはなかった。

野戦行き近し

昭和十三年の暮れ、武漢三鎮は落城した。同十四年四月には、我々の先輩である藤堂部隊が廬山攻略戦を展開していた。そして四月十八日ついに牯嶺^{コウリウ}の街を占領した。牯嶺は海拔千メートルぐらゐの盆地で夏は涼しく、日本でいえば軽井沢のような所で、中国の要人の別荘、そして第三国の権益が多く、敵はこの第三国権益を盾にたてこもり、攻撃は難攻をきわめた。

永島部隊の通信隊教育も順調に推移し、一期の検閲も終わり、私たち初年兵全員陸軍歩兵一等兵に進級した。同時に古兵の一選抜上等兵が誕生した。八月に入って通信隊長の三好少佐が着任され、永島大尉は副官になられた。かくして独立混成第十四旅団通信隊の編成が完結し、出陣を待つばかりとなったのである。

三好部隊の編成は、有線二個小隊、無線一個小隊で、各小隊は五個分隊に分かれ、私は第一小隊（橋少尉）第二分隊（前田伍長）所屬となった。前田分隊の隊員は、前田伍長・岸本上等兵・浜田・山本・藤原・大森・長井・橋本・塔向と馬一頭であった。分隊長以

外は全員二十一歳という若き精銳であった。この中で長井君だけが名譽の戦死を遂げたのであった。

いずれも新品の兵器・被服・その他一裝備の物品が支給された。今まで刃のついていなかった短剣も、ひげがそれるほどに研がされた。空っぽだった葉ごうにも三十発の実弾が裝備された。お米も牛缶も乾麵もパンも背のうに詰められた。戦地に行く兵隊には「認識票」なるものが渡される。小判型でアルミ製、肩かけられるようひもがついている。私の記号番号は、「独混武通五七」と記憶する。これは戦闘によって体が木っ端みじんになった時でも、この認識票によってどの部隊の誰と分かるのである。五七は親父の亡くなった歳、結果はお陰で無事帰還することができた。

いよいよ出陣

この頃の軍事行動については、兵隊の出す手紙の検閲もなかった。出発時間も決まっているし、それを家族に通報しても差し支えなかった。むしろ堂々と駅頭で送ってもらいたかった。出発の前日は、姫路駅での

乗車訓練が繰り返しおこなわれた。営庭に縄を張ってボギー車の模型を作り、両方から一列になって乗る。馬匹と通信機材・車両は後部の貨車に乗せられていた。

三好部隊長以下本隊は完全軍装に身をつつみ、ラッパの音も勇ましく原隊を出発、姫路駅に向かって行進を開始した。時に昭和十四年八月十五日午前十時であった。ちょうどこの日は新盆の十五日、私の郷里では「お精霊流し」の日であった。

姫路の駅はそれぞれ郷里からの見送り人でごった返していた。歡呼の聲に送られて、汽車は一路広島の宇品港へと向かった。途中通過中の車窓から和気駅が見えた。和気駅は私の出征のときの乗り換え駅で、満州事変当時出征兵士をいつも送りに来たのがこの和気駅であった。

姫路から宇品までの数時間は大名旅行であったが、突然敵襲に遭う羽目になったのだ。敵襲といっても「ノミ」の襲撃である。

御用船に乗って

宇品駅から港までは行進だった。御用船（三千トン級の貨物船であるが、当時兵隊を輸送するときはこのように呼んでいた）は既に港に停泊中であった。

我々を乗せた船団は、その日一路関門海峡を通り抜け、玄界灘へと進路をとったのである。一夜明けるともう島も陸地も見えないし、そして兵隊達はこの船がどこを指して進んでいるのか分からない。ただエンジンの音と僚船と時々見え隠れ護衛してくれる海軍の駆逐艦の姿だけである。

船は肅粛と目的地に向かっているのであるか。何分にも兵隊は五等船客とあって、たまたみ二疊に三人詰め、そこへ持ち物全部が置いてある。兵隊は重なり合うような形で寝たのを思い出した。おまけに船底には愛馬が乗っている。時は八月、馬糞の匂いが上へとあがってくる。馬も暑かろうが、兵隊もへとへと、胸がむかむか、そろそろ船酔いが始まった。

出発して三日目か四日目か、ハッと気づくと海水が真黄色になってきた。そして遙か彼方に大陸が見えて

きた。誰かが「あれは揚子江の入り口ではないか」と言い、その時我々は、中支派遣軍であることに気づいたのである。それから船団は、上海を横目で見ながら揚子江を上り始めた。さすが川幅は広く、船は川の真ん中を進んでいるが、両側が霞んで見えるほど広い。一年前だったら砲弾の一発でも撃ち込まれたであろう。やっと到着したのは南京の沖合であった。早速はしけが用意されて上陸が開始され、夢にまで見た大陸の土をしっかりと踏みしめたのであった。昭和十四年八月二十日のことであった。宇品港を出発してちょうど五泊六日の航海。この船には野砲部隊も一緒であった。

南京から九江へ

南京で数日間休養をとった我が部隊は、再び御用船に乗り込み、船は揚子江を上り出した。さてどこへ行くのだろうか。到着したところは九江県九江、直ちに上陸開始。九江の市街地はほとんど破壊されていた。有名な時計台を横目で見ながら、甘棠湖畔にある独立

混成第十四旅団（藤堂部隊）の指揮下に入るとともに、旅団司令部のすぐ南側に位置する所に通信隊本部を設置し、その任務に当たることになった。

初めて前線へ（前田分隊と水田分隊）

旅装を解く間もなく、前記への出動命令が下った。前田・水田両分隊の出動先は、廬山に駐留している独立歩兵六十二大隊（佐沢部隊）本部であった。佐沢部隊は廬山攻略戦に参加し、名をはせた部隊である。我々の分隊は、上陸して最初の任務が名門佐沢部隊への配属であることを大変誇りに思った。初日は牯嶺の軍官学校（日本の士官学校）に一泊、翌日から蒋介石の別荘に二、三泊した。

その後すぐ牯嶺郵政局の二階に通信所を設置し、入り口に表札を掲げた。もちろん水田軍曹の直筆である。そして第十一軍通信隊からの引き継ぎが完了した。

引き継ぎを受けた当初は、回路が混線状態であり、まともな通話は出来なかった。通話回数のない夜間

に、まず交換機の分解補修、昼は戦闘で破壊された線路の補修を毎日毎日実施した。内地の訓練とは違い、補修時には必ず銃には実弾が込められていた。どこに行っても佐沢部隊の歩哨が立ち、警備には万全を期してはいたが、夜間になるとどこかで銃声が聞こえ不気味であった。こんな中、いつもユーモアをもって分隊に潤いを与えてくれるのは浜田古兵だった。

既設の電話線も交換機も耐用年数の過ぎた分取り品で故障続出、その度に水田軍曹以下徹夜の修復作業をおこなった。牯嶺の冬は早く来て寒い。廬山は海拔千七百メートルで、牯嶺の街は千メートルの盆地になっており、冬はかなり厳しい。ストーブの燃料が無いので生の木を切ってきては薪を作った。これも命がけで、のこぎりのほか騎兵銃は忘れなかった。

旅団司令部へ出頭、司令部勤務を命ず

我が前田・水田分隊が廬山の佐沢部隊に配属されてから四カ月はアツという間に過ぎた。五老峰にも雪が見えだした。十二月の初めだったと思う。通信隊本隊

から「大森を至急九江へ帰隊させよ」との命令が舞い込んだ。せっかく慣れた仲間との決別はとても辛かった。命令ともなれば致し方ない。完全軍装に実弾を込め、単身思い出多い牯嶺と、分隊の仲間と別れを告げ下山した。

通信隊本部に着き申告を済ませた。小林准尉は「大森疲れているだろうが、すぐ司令部に行って神坂准尉の指示を受けるように」とのことであった。通信隊で朝食を済ませてから司令部へ出頭した。まず参謀部の神坂准尉を訪ね、指示により私は参謀部情報室に机を置いてもらった。旅団参謀部は、高級参謀室・将校室・書記室・情報室の四室になっていた。

タイプライターが内地から送られてきて梱包のままであった。早速皆に手伝ってもらい組み立てた。そこへ前沢参謀が現われ、「これを打ってみよ」ときた。ある程度の使い方しか知らないのでドキドキしつつ書類を仕上げたら「大森は今日から参謀部勤務だ」ということになった。

情報室での勤務

こうなったら意地でも一人前の「タイプ打手」になってやろうと、私のタイプ独学特訓がその晩から始まった。元来タイプは女性の仕事であった。戦地でも総司令部（南京）、軍司令部（漢口）には女性の軍属タイプストが配備されていたが、師団司令部以下は、まだ危険が伴うということで女性は許されなかった。私の腕前も捨てたものではない。大いに間に合うようになった。支那派遣軍総司令官畑俊六殿、第十一軍司令官岡村寧次殿、上海特務機関長宇都宮直賢殿、当時偉い人にあてた書類をずいぶん作成した。

ある日、かなり分厚い書類が回ってきた。「兵団長会同席上における軍司令官閣下講演要旨」であった。神坂准尉から、「大森すまんがやってくれ、明日朝までにできるか」「やります」と言ってしまった。さあ大変。その頃九時になると電灯が消える。ろうそくを五本も六本も立てて頑張り、一睡もせず午前九時には完成させた。いつも朝まで付き合ってくれるのは、山口県下松市出身の弘中一等兵だった。

私たちのいる情報室は、いわば書記室の分室で、将校も下士官もない兵隊ばかりの部屋であって、各独立大隊から派遣になった優秀な兵隊と、その他専門職すなわち語学のできる人、字のうまい人、ガリ板の上手な人、製図のできる人等で、私もそのうちの一人であった。階級は上等兵でありながら、どの兵隊も千軍万馬、将校さんを相手に一歩も引けをとらなかった。インテリ集団とでも言うか、なんでも解決してみせる。とても愉快な部署であった。

昭和十五年の迎春それから

昭和十五年の新春を戦地で迎えることになった。我が部隊の警備地区もおおむね平静を保っており、藤堂閣下の年頭の訓辞があったのち、参謀部全員で司令部の玄関で記念撮影をした。

通信隊へ帰ると、新潟からの初年兵の入隊準備で忙しそうだった。通信にいれば私も二年兵になれるが、本部ではいつまでたつたも初年兵だ。しかし、飯上げも掃除も当番制で、新旧のないところが本部のいいと

ころだ。日本では阿部内閣がわずか四カ月で倒れ、一月には米内内閣が誕生した。私たち兵隊にはそんなことは全く関係なかった。私は戦地へ来てまだ一年しかたっていないので考えたことはないが、古い下士官連中にはいつ帰れるか、集まればその話ばかり。無理もない、予備後備役で事変が始まって以来の連中も大勢いる。妻子の夢を見るのも当然であろう。

五月になって、第十一軍の宜昌作戦が開始された。

そして我が旅団から、独立歩兵第六十一・六十二・六十三大隊の一部に出動命令が下った。厳しい戦闘で多くの犠牲者をだしたが、本部も戦闘司令所を設置し任務を全うした。六月になって通信隊からいい知らせがあった。「上等兵に進級したので申告に帰ってこい」と、よくぞ本部勤務の兵隊を忘れないで、一選抜に入ってくれたものだ。

七月頃だったか、内地の母から久しぶりに便りが来た。岡山県庁からお呼びがあり、勲八等の勲記と勲章それに支那事変の従軍記章をいただいたとのことであった。この年は紀元二千六百年にあたり、四月二十

九日の天長節に「支那事変第一回の論功行賞」の授与が実施されたのであった。

藤堂部隊長の戦病死

昭和十五年六月三日、司令部全員の緊急集合があった。戦況に変化でも起きたのではと、皆心配顔で前庭に集合整列した。前沢参謀が現われ、「我々尊敬おくあたわざる藤堂閣下におかせられては、前線地区を視察中転倒され、腸捻転を併発。昨日九江兵站病院において亡くなられた。諸士は謹んで哀悼の意を表するとともに、新任部隊長が着任されるまで、さらに心を引き締めて軍務に精励してほしい」との訓辭がなされた。藤堂閣下は藤堂高虎の末えいで、名家の出身であった。いつも司令部の前庭で兵隊達と一緒に体操していたのが思い出される。

それから数日後、九江飛行場に到着されたのが新任の部隊長、中山惇閣下であった。中山閣下は乗馬が得意で、どこへ行くにも人馬一体であった。

参謀部情報室の兵隊

昭和十六年初めごろの情報室には、次のような侍がいた。そのころ兵長という階級ができて大勢兵長に進級した。

- ◎ 笠原兵長 埼玉県出身。熊谷陸軍飛行学校に勤務していた。字が上手で、しかも人格者、部屋のリーダー的存在であった。
- ◎ 古川兵長 東京都出身。父親が鉄工所を営んでいた。眼鏡をかけてボンボンのような顔、原隊との電話連絡の際、「ろ獲品」を「ロカクシン」と江戸っ子でしゃべっていたのが印象的であった。
- ◎ 渡辺兵長 山口県出身。小学校の代用教員をしていた。小柄だが動作は大きく、あまり物事に動かない。
- ◎ 矢吹上等兵 広島県出身。この人も学校の先生だった。ガリ版書の名人であるとともに、字引のような人で、何かと便利であった。
- ◎ 赤松上等兵 愛媛県出身。東京外語出で、もつ

ぱら涉外だった。将校をあごで使っていたのも彼。この頃まだアメリカとは戦争していなかったので、アメリカ領事館からキャラメルやラッキー 스트ライクをもらってきては皆を喜ばせていた。

- ◎ 土屋上等兵 長野県出身。凡庸としていた。器用で、写真の撮影、現像、焼付は上手であった。
- ◎ 田辺一等兵 広島県出身。神戸税関に勤務していた。頭は良いが、上司の受けが今一つで、原隊の人事係が俺の存在を忘れていやがる、進級させてくれん、と言っているもぼやいていた。
- ◎ 永井上等兵 愛媛県出身。住友化学の関係会社に勤務していた。真面目な良い男で、戦後何回か文通があった。
- ◎ 弘中一等兵 山口県出身。謄写版刷りと製本が専門。私がタイプ of 残業しているとき、いつも最後まで付き合ってくれた。
- ◎ 難波上等兵 福山市出身。赤松上等兵と交替で来た。帝国人絹勤務、語学ができるので専ら参謀の通訳をしていた。

◎ 大森上等兵 最後に登場は私。岡山県出身。藤

田組（現在の同和鉱業）柵原鉱山に勤務している。「タイプ打手」とは前沢参謀が名付け親である。鉄砲を打つのは苦手だが、結構便利な兵隊であった。

私の大好きな仲間は大体以上の連中であつた。不思議なことに難波君以外全員補充兵であつた。その他暗号班の連中が数人いた。

前沢参謀の温情に感謝

ある朝、参謀から呼び出しがあつた。叱られるのか？「大森上等兵まいりました」前沢参謀はおもむろに「今度お前は内地に帰還することになった。ご苦労であつた。何か記念にと思つて、今朝空気の良いときこれを書いた。大きい紙がなかったので小さいが勘弁してくれ。読めるか」「よく読めません」と言う、メモ用紙にはしり書きで漢詩を棒書きに、

『天空に鳥の飛ぶに任す。海ひろうして魚の踊るに従う。大丈夫この度量なかるべからず』

昭和十六年春 中支薄陽 中山部隊前沢大佐』と書いてあつた。

そして「銃後で働くのも、お国に尽くすことに変わりはない。頑張ってくれ」私は参謀の心情にしばし我を忘れ感激にむせんだのであつた。私は五月に帰還したが、前沢参謀殿も七月に内地勤務になられたと聞いた。

二年ぶりに内地へ

昭和十六年五月、九江で我々帰還兵を乗せた輸送船は、すべるように揚子江を河口に向かって進んだ。二年前この川を上ったときの緊張はない。上ったとき右に見えた安慶の斜塔が今度は左に見える。上海の市街地を遠望しながら船は全速で進む。一夜明けるともう黄色のシナ海に入っていた。行くときと大違い、敵しい命令はない。楽しい航海が続く。

乗船して三日目だったか、左方向に島が見えた。誰かが済州島ではないかと言った。帰りは大した船酔いもなく平穩な航海であつた。

四日目、突然誰かが大声でどなった。「日本が見えるぞ!」。一人残らず甲板へ集合した。もう私たちの船は玄界灘まで帰っていたのだ。かすかに九州本土が見える。そして鹿児島本線を走る蒸気機関車の煙がはつきり見えるではないか。みんな一斉に「帰ったぞ!」と叫んだ。生涯で一番嬉しかった瞬間ではなかったろうか。

船は検疫のため関門海峡に一泊することになった。大勢軍医が乗船してきて、甲板上でお尻にガラス管を突っ込んだ。これは検便検査である。海の方に目をやると漁師のおやじが、今釣ったばかりの大ダコをつかみ上げて歓迎してくれた。関門海峡を往復する連絡船の客たちも手を振ってくれる。

翌日、船は広島県の似島沖に入港した。似島に上陸して検疫を受けるのである。この検疫は陸軍自慢のとても敵しいものであった。まず棧橋を上がると同時に、消毒液の中をベチャペチャと歩く。兵器・被服・所持品をそれぞれ所定の場所に置き、金属・皮革・布別にガス・噴霧・蒸気の消毒をする。最後が身体の消

毒である。

素裸にされ消毒液（ショウコウ水）の風呂へ入り、首まですっぱりつかり、衛生兵の合図があるまで上がることはできない。これで首からは完全に消毒された。そのあとは蒸気消毒された軍服の乾くまで暫しの間、浴衣姿で畳にすわり、安芸娘の茶菓の接待を受けることになる。やっぱり日本が一番いい。

一切の検疫行事が終了したので、このまま上陸できるかと思いきや、また輸送船に積み込まれた。私たちが下船している間に、船内も綺麗に消毒されていた。私物は一切没収されていた。この日は消毒済みの船で一夜を過ごすこととなった。これは関門海峡での検査の結果待ち一報で、万一保菌者が一人でも出れば上陸は当分おじゃんであったが、幸い保菌者も出ず、翌朝晴れて上陸が許された。

まるまる二年ぶりに祖国日本の土を踏むことができた。宇品駅までの行軍中は褌たすきを掛けた国防婦人会の大歓迎を受けた。そして姫路の中部第五十三部隊（師団通信隊）にいったん落ち着き、五月二十五日に召集解

除。戦友とは再会を約しそれぞれ懐かしいの郷里に向かった。

私の追憶

高知県 大西清盛

昭和十二（一九三七）年に始まった日支事変は一日と拡大の一途をたどり、ついに昭和十六年十二月八日、あの世紀の第二次世界大戦へと突入したのである。当時の戦争の様様は大本営の発表によるのみで、我々国民は一喜一憂するのみだった。当時の事は走馬灯のごとく全く過去のものとなった現在である。十分な記憶もない。しかし、私なりに断片的にその當時を彷彿してみたのである。

ごく短い期間ではあったけれども、私も大戦末期の中国戦線を四六時中駆け巡り、またその時点において人生のはかなさをも十分に味わった一人でもある。

昭和十九年六月二日、この日は私の生涯忘れ得ない日である。当時私は、高知市丸ノ内にある高知営林局に勤務していた。しかし私はその営林局を退職した。そして当時満州国の半官半民の満州林業株式会社に社員として採用され、ソ満国境の街、佳木斯支店勤務の辞令まで受け取っていた。営林局退職後少しの間、私は故郷に帰省し渡満の準備と休養中だった。そして六月早々渡満の予定で新しく勤務する会社と新日本社到着などの打合せが出来ていた。

その五月二十五、六日に海外渡航証明を受けるべく所轄の駐在所へ出掛ける寸前のことだった。私あてに一片の召集令状がとび込んで来た。一片の紙切れだが、これが私の運命を一八〇度転回させた。

昭和十九年六月二日、私は高知市朝倉の西部第三十四部隊第二中隊第三班へ入隊を余儀なくされ、以来終戦、復員まで私は軍隊の消耗品となった。

私たち第三班は約三十人、そのうち最年長者は三十四・五歳が大半を占めていた。入隊してみると今まで